

■中野区制90周年（二〇二二年一〇月一五日、中野区立中野東図書館）

資料 中野区ゆかりの作家―芹沢光治良

勝呂 奏（桜美林大学）

1 中野区立中央図書館編『第14回中野区ゆかりの著作者紹介展示 芹沢光治良―中野区小滝町に暮らしたエクリバン―』（二〇一八）

芹沢光治良 明治29（1896）年5月4日〜平成5（1993）年3月23日

作家。静岡県沼津市我入道生まれ。本名芹沢光治良。十二人兄弟の次男として誕生。幼い頃両親や他の兄弟と別れ、祖父母、叔父夫婦と暮らす。我入道では男子は漁師になる慣習であったが、船酔いのために漁師にはなれず、祖父のすすめる商家の奉公人にもならず沼津中学校へ進学。中学校に新設された行啓記念館の図書室係になり、文学に親しんだ。その後、第一高等学校（東京帝国大学予科）へ進み、大正11年東京帝国大学（現東京大学）経済学部を卒業した。

幼い頃から貧困に苦しんだ光治良は、社会から貧困を無くし、世の中の役に立つ人間になりたいと、大学卒業後農商務省に入省するが、思うようにはいかなかった。もう一度自分の可能性を試し、経済について学びたいと留学を希望する。その頃、周囲の勧めにより愛知電鉄社長藍川清成の次女、藍川金江と結婚。大正14年二人でパリに渡り、光治良はソルボンヌ大学に入学する。昭和2年1月、夫婦の間に長女万里子が誕生。しかし3月に光治良が肺炎で入院。その後結核であることが判明し、フランスやスイスで一年間の療養生活を送る。

帰国後、中央大学の講師を勤めながら雑誌『改造』に投稿した『ブルジョア』が、一等に当選。翌年に朝日新聞で連載をもち、講師を退職。以後作家として活躍する。家庭では長女万里子の後に次女朝子、三女文子、四女玲子を授かり、四人の娘の父となる。

昭和40年からは日本ペンクラブの会長としても活躍、晩年には「神シリーズ」と呼ばれる作品を一年に一本書き下ろすなど、筆の勢いは衰えなかった。平成5年、96歳という天寿をまっとうし自宅で死去。

昭和42年に勲三等瑞宝章、昭和49年にフランス芸術文化勲章コマンドール章受章。代表作は『巴里に死す』『人間の運命』など。

2 芹沢光治良「異郷に浮ぶ富士」（一九七四、高杉一郎・岡田英雄編『ふるさとの文学 静岡』所収）

省みると、私の文学も多くのものを故郷の風土から受けている。明るくスタイルばかりでなく、人間的な文学精神も、故郷の風土の賜物である。それから、私の文学と人間の中の、明るいがしんの強さも、太平洋を渡って吹きつける激しい冬の西風と、幼い頃から闘って、自然につくりあげられたもののものである。

3 芹沢光治良『文学者の運命』（一九七三）

・その神は当時、宇宙を創り、人間を創り、自然法則を創った無限大の人格のように、私には考えられた。そして、その神の意志の動向は、人類の歴史や人類の進歩や大衆の幸福のなかに、察知できるように思われて、それまで学んだ社会学が、その点無駄ではないように考えられた。

・神という文字を使ったが、私は特定の神を信じているわけではない。ただ、この生成発展してやまない宇宙や生物や人間を想い、この宇宙に微塵の狂いもなく働いている自然の理法を想う時、自然を超越した巨大な力——道徳的存在を信じないではいられない。それを自己流な神と呼んでいるにすぎないが……

・私にとって、神のあらわれは、歴史の間多くの圧迫に苦しんだ庶民が解放され、自由になることにあると、思われた。言葉をかえれば、庶民が病氣や身分や因習から解放されて、人間らしい幸福を得ることが、言葉なき神の意思であると考えられた。それ故、私は素朴に、それに応える仕事をしたいと願った。

4 「第三回懸賞創作入選発表」（一九三〇・四『改造』）

毎年有為な新人を送り出して我文壇に清新の気を漲らしてきた本誌懸賞創作は、本年度の入選者として左の二氏を推薦する。今回の応募作品総数一千余篇、そのうちより数回の銓衡を経て、佳作十三篇を残し、更に厳選の結果二篇の入選作を決定した。「ブルジョア」は新鮮なる作風をもつて、「シベリア」は力強いプロレタリア意識をもつて、共に文壇の一大収穫たるを恥じない。選外の諸作も夫夫捨てがたい点はあつたが、今一つの努力を切望する。

5 芹沢光治良「ブルジョア」冒頭

これも崩滅する階級の一態である。

一

租税の大半を、軍備に奪われない国民は、仕合せである。

「スイスは夢の国です」

「この世の天国です」

この言葉は、肺結核の夫の転地に従ってパリを去る時には、フランス人に独特なお世辞だった。山、湖、空、光、色、総て、スイスに来てからは天国のものだった。（略）

6 芹沢光治良「ブルジョア」の出来るまで」（一九三二『近代生活』）

国際都市に集る各国人を書き分け度かつた。病む者には病氣と性の闘争、健康者には階級の闘争、それを書き度かつた。そしてフランス語の持つ調子や色合ひを日本語に取入れ度かつた。それ等がどの位成功したか知らない。

7 芹沢光治良・初期三部作

三部作「昼寝している夫」（一九三二）「椅子を探す」（同前）「橋の手前」（一九三三）

杉野は次第に自嘲したくなって、静かに云ってみた。——死病を数年闘い癒してからは、ただ大空を仰いで無為に生きていけるのも仕合わせである。ましてわが書く小説を待つて

人間の意志を越えて、幸福や不幸、喜びや悲しみをもたらす超越的な力。また、その善悪吉凶の現象。巡り合わせ。運。命運。転じて、幸運、寿命、今後の成り行き。

・アランの『定義集』（森有正訳、一九八八）

運命 DESTIN 運命とは、将来を知りそれを告知できる人間の作為〔Fiction〕である。それは、われわれには将来を変えることができない、ということを言う一種の言い方である。（略）この作為に対抗できるものとしては、信仰〔FOI〕そのものにほかならぬ自由への信仰しかない。自分の運命を変化できることを信じない人のことを、彼は信仰をもっていない、と言う。

12 新潮社版《神》シリーズ全八巻（一九八六～一九九三）の構成

『神の微笑』

『神の慈愛』

『神の計画』

『人間の幸福』

『人間の意志』

『人間の生命』
『大自然の夢』
『天の調べ』

*新潮社版愛蔵セット版『神と人間』（二〇〇六）

13 芹沢文子（三女）談話「父・芹沢光治良の晩年」（一九九三『波』）

あの日は、午後三時半くらいまで二階の書斎で仕事をしていました。それから、お客様が見えたのでその方とお話をした後、また書斎に戻って執筆を続けていました。そして、お風呂に入って珍しく頭を洗って出てきて、一階の居間の椅子に座って休んでいるように見えたのです。私は隣の部屋にいます、静かなので寝たのだろうかと思っていたのですが、そのまま息を引き取っておりました。

14 「遺稿」冒頭の詩（一九九三）

雲もなく、
晴れわたり、
風もなし、
親神のお喜びが
暖かに
伝えられ、

われ等人間も、
また、等しく、
親神のお喜びに浴して
天上に高々と昇る、
佳き日なるかな――